



**森を育てよう。
そう思っていました。**

～ 働くひとが成長する社会事業へ ～

一般社団法人チカク 代表理事 赤木美子

2015年3月1日

倉敷チボリ公園閉園。無謀と言われた起業。

平成20年12月31日に閉園した倉敷チボリ公園。一般社団法人チカクは、チボリの女性スタッフが中心になって閉園直前の同年12月26日に設立した、おそらく岡山県で一番最初の一般社団法人です。

造って壊してだけじゃ芸がない。そこから立ち上がる物語があってもいいんじゃないか。そんな風に思って一歩踏みだしたら道ができ、差し伸べられる手があって、おかげさまでいまでは有給のスタッフ十数名を抱え、倉敷市からの委託で1拠点で倉敷市茶屋町に、自主事業として4教室を倉敷と岡山に開設しているほか、企業や公的機関からさまざまなご依頼をいただくようになりました。

朝から晩まで、雨の日も風の日も晴れの日も、ほとんど一年中やすみなく、広域からのお客様をさまざまな現場で迎えたチボリでの経験。県内外のクリエイターさんと、さまざまな企画・宣伝、制作・運営まで一通りを経験した濃密な11年間は、なにものにも代えがたい私の財産であり、多様なクライアントのニーズの実現に役立っています。

多様なニーズに応える子育て支援を目指して

現在、一般社団法人チカクは、倉敷市からの委託を受けて地域子育て支援拠点「ちゃやっこひろば・チカク」を運営しています。ここは倉敷市にとってはじめての一軒家の住宅を使った「つどいのひろば」として開設当時の平成24年10月、ずいぶん話題になりましたので、記憶の隅にある方もおいでになるかもしれません。平日の9時半～14時半まで、0歳から3歳までの乳幼児と保護者のために開かれており、倉敷市内に点在する18カ所の支

援拠点と連携しながら地域の子育てをサポートしています。



私たちが倉敷市の「子育て支援」の一端を担いたいと立ち上がったころは、ちょうど国の子育て支援制度が変わる、その前段階の議論が交わされている中のことで、多様な子育てニーズに対応するために「多様な主体による子育て支援」が必要だという声が聞こえはじめていました。これまでこうした支援拠点を運営しているのは、保育学科を持つ大学やお母さんたちの団体、福祉協議会などが中心で、その中に一般社団法人チカクが名前を連ねることができたのも、こうした時代の流れに乗った側面があったと思います。

コミュニティビジネスへの転換

地域子育て支援拠点「ちゃやっこひろば・チカク」の開設から遡ること2年前の平成22年。私たちは経済産業省のコミュニティノウハウ移転事業として、大阪府高槻市のNPOから、いわゆる「プレ幼稚園」の事業のノウハウを学び、倉敷市内に小さな教室「ようちえんごっこプチャぱれっと」を開設することを決めました。

外からのアイデアを受け入れることにあまり抵抗がなかったことが良い結果を生み、さらに、この事業をはじめたことで、私たちは

優秀でハートフルな保育スタッフを採用し、その後の子育て支援事業への展開につなげることができたのです。平成 26 年度の在籍数は 4 教室に 2 歳～ 4 歳児が 60 名弱。子どもたちはここで丁寧に育まれ人との信頼関係の核となるものを得て、巣立っていきます。



この取り組みは“まちなか”に母子を中心とした小さな「疑似コミュニティ」を生み出すものであり、チボリを地縁のあるコミュニティから程よく離れた気楽な「疑似コミュニティ」と考えていた私にとって、なくしたものを埋めるピースのように感じられるものでした。さらに、地域の公民館などを使った週 1 回から 2 回の短い時間の保育は、近隣に住む子育て中の保育士の就労の場としての機能も合わせ持ち、利用者からの会費収入が団体を下支えする固定的な収益になるという利点があります。また、転勤族、他地域からの移住者など地縁の薄い層に加え、倉敷市外の利用者もいて、さまざまな子育てニーズに気づききっかけになったのです。

倉敷発のミュージカルをもう一度岡山で

「ようちえんごっこプチぱれっと」の開設準備と並行して、平成 22 年夏ごろから、倉敷チボリ公園で人気を博したミュージカルを再演しようという動きがはじまりました。倉敷生れのオリジナルミュージカルをもう一度岡山でという、プロデューサーの言葉に覚悟を決め、旭川荘名誉理事長の江草安彦先生を名誉顧問に、青木内科小児科医院理事長の青木佳之先生を委員長にお迎えしてアンデルセン・ミュージカル「ハンスの冒険」岡山公演実行委員会を立ち上げました。その後、デンマーク大使館の後援もいただき、岡山倉敷の 2 会場 8 公演に 2,000 人の観客を集め、成功のうちに幕を降ろしました。



文字にすれば数行のことなのですが、チケット代金だけでは成立しないこの公演を実現するために岡山倉敷の産官学の皆様のご支援を得たこと、いまでも胸が痛むほどほど、ありがたいと感じています。おかげさまで、なんとか収支をあわせて開催でき、さらに実現したことへの評価が私たちを次のステージへ導いていきました。

東日本大震災と子ども防災ネットワークおかやま

ハンスの公演の初日は平成 23 年 3 月 18 日。その直前の東日本大震災の発災は、その後の私たちの活動に大きく影響を与えることになります。

同年夏、公演をバックアップしてくださった全労済岡山県本部から、震災の教訓を岡山の子どもたちに長く伝えていくための取り組みへの参加のお話をいただき、平成 23 年 10 月、「子ども防災ネットワークおかやま」の一員としての活動がスタート。平成 24 年 3 月には、倉敷市との共催イベント「子供たちに伝えたい防災のこと」を開催、その後現在に至るまで、幼稚園・保育園からのご要望に応じて「防災体験プログラム」の出前授業を続けています。



「釜石の奇跡」を生んだ群馬大学大学院教授・片田敏孝先生による、①想定にとられるな、②最善を尽くせ、③率先し避難せよという避難三原則。この三原則は複雑化する社会を生き抜くために必要な知恵であり、特に③は自らの考えで決断し行動することと考えると、比喩として「駅前の瓦礫の中から生まれたチカク」が伝えることとして、ふさわしいという思いもありました。

3年余の防災教育活動の間に、チカクの中には防災士4人が誕生。いまでもその時の環境

に合わせて決断し、人と会い、勉強したり挑戦したりの毎日が続きます。

森を育てよう。そう思っていました。

チボリの中にいた時から始め 10 年以上続けているのが「夏休み★宿題応援団」です。クラフトマンシップを持つ地元のアーティストに、本格的な作品を用意してもらい、夏休みの工作の宿題として子どもたちが挑戦するこのプログラムはリピーターが多いことも特徴で、ここでも私たちは町なかに小さな「疑似コミュニティ」を育んできました。

社会の中の大小さまざまな矛盾や不具合を、批判、論評するだけでなく、当事者として身近な課題に取り組んでいきたいと私たちは考えています。当面、目指しているのは、乳幼児から 10 歳ぐらいまでの子どもとその親を包含する小さな「疑似コミュニティ」を、さまざまな形で町なかに作り続けること。

自然災害が多い日本で未来を生きる子供たちのために、そこで「当事者意識」を持って取り組む姿勢の大切さを伝え、さらに子どもたちを通じて大人たちにも伝わればいいと思っています。



チボリの中で私たちは町なかの森を育てていました。そしていまもある意味変わらず、森を育てるように 100 年という単位で人を育てる「志」をもって、事業を続けていきたいと思っています。